成功事例で探る、補助金申請のコツと戦略  
2024年10月17日　夢をかなえる勉強会　寺子屋第２回目の教材として収録

アーツカウンシルみやざき  
プログラムディレクター　山森達也

挨拶

アーツカウンシルみやざきの山森と申します。本日はよろしくお願いいたします。

アーツカウンシルみやざき

アーツカウンシルみやざきというのは、令和元年国民文化祭宮崎大会の開催に合わせて設立されました。国文祭のレガシーを、宮崎県の文化振興の核として未来に伝えていく、という役割を持って設立されました。

国文祭は宮崎での国文祭は2020年を予定していたんですが、新型コロナの影響もあって、2021年の延期というふうになったんですけれども、実際は2020年に開催されたプログラムもたくさんあったんですね。なので結果としては2か年にわたって開催された、というふうな見方もできます。僕なんかはそういうふうな見方をしています。この2カ年開催というのが、実は宮崎県にとってはとても大きい成果だったと、こちらは思っております。

全国で国文祭が毎年行われてはいるんですけれども、多くの場合は各文化芸術活動の全国大会というふうな面があるんですね。日本舞踊とか茶道とか大正事とか、宮崎では健康麻雀大会、健康麻雀の全国大会なんていうのもありました。その際にお師匠筋の方であったりだとか、またはお偉い道のプロフェッショナルだったりだとか、普段各地にお招きできないような方をお招きするような機会でもあるんですね。

この全国大会というふうな形というものが、国文祭のプログラムの結構な量を占めてはいるんですけれども、ご存知の通り、コロナの影響で簡単に言うと、県外への移動とか、招き入れるようなことができなくなってしまったんですね。その結果宮崎の国文祭で何が起きたかというと、自分たちで何とかするというふうな動きになりました。つまり全国から来るような先生方とかをお招きしなくても、できるような形っていうのをみんなで模索したんですね。さらにはコロナの感染防止対策を施して実施することにもなりましたし、その感染防止対策をやりながら自分たちの事業を実施するという意義を問い直す、という機会にもなりました。

この3つというのが実は宮崎県の文化芸術においては、とても大きい成果でした。もう一つが今のスライドの真ん中の写真にもあるんですけれども、高鍋町で行われましたギフト展を代表する障がい者芸術文化祭というものが開催されたということが、もう一つの大きい成果です。

一口に障害というふうに言っても身体障害、精神障害、知的障害、様々な障害があるんです。宮崎県内では、障がい者の活動というのが、特に文化活動というのが広く知られる機会というのは決して多くなかったんです。ただ、この国文祭と同時開催で行われました障がい者芸術文化祭において、その文化、芸術活動、障害のある人たちによる文化、芸術活動が広く知られるということになりました。

この一例として出していますのが、高鍋町美術館で行われました宮崎アーティストファイルギフト展。こちらに出展した後藤拓也さんという方の作品なんですけれども、この作品は今年2024年、Art to You!障がい者芸術世界展、IN SENDAI 2024というところで、内閣総理大臣賞を受賞しています。これはとても大きい快挙だというふうに思っています。

宮崎県内ではこの作品があまり知られていないというのがとても残念ではありますが、こういった機会が増えていくと、いわゆる障害のある人たちの理解、というのも促進するんじゃないかなというふうに思っています。というのも私自身の仕事というのが、今は宮崎県でこのアーツカウンシルみやざきという文化芸術活動に対する助成、あと事業相談、あと自分たちでイベントの実施、なんていうのもやっているんですけれども、その前はですね、静岡県の浜松市にありますクリエイティブサポートレッツというところで活動していました。

で、まぁちょっと画像はその時にあった事業のちょっと写真なんですけれども、ここではですね障がい者芸術は実はやってないんです。じゃなくて障害のある人とアートを結びつける、というふうな取り組みをしていました。日常的に障害のある人たちの支援を僕ももちろんやるんですね。その中でその支援の仕事が終わったら、イベントごとをみんなで考えたりだとか、というふうなことをやっていました。

さまざまなヒット作があるんですが、そのうちの一つの「表現未満、」という取り組みがありまして、今、画像に出ているのが「表現未満、文化祭」になるんですけれども、これらを中心に表現未満活動というのが、文化庁の芸術選奨の新人賞を、うちの代表が受賞したり、と、たくさんの方に評価していただきました。僕自身がこのクリエイティブサポートレッツで学んだというのが、福祉の視点の面白さというものになります。

一般の人たちだったりだとか、普通の社会生活を送っている人たちっていうのは、障害のある人たちと関わる生活、日常っていうのがあんまりないんですよね。これは日本の福祉行政のいい点でもあり、もちろんいいメリットもあるんですけども、悪い点でもある、というふうに思っています。だから街中で障害のある人と出会ったり、関わったりするようなことがあると、単純にびっくりしてしまうみたいなことが起きます。

びっくりしちゃうと人間って思考停止になっちゃうんですね。どうしても考えられなくなっちゃう。障がい者に限らず、突然のことには人間はびっくりしてしまうものなのですが、そういうことがないように普通に生きていると、意外と突発的なことが起きているなんか、事故とかが起きた時とかに意外と皆さん振る舞いとしてやるのが積極的な無視というものになります。

この積極的な無視というのは、それはいわゆる排除でもあるんですね。あそこでこういうこと起きてます、あそこで倒れてる人がいます。ごめんなさい、私は関係ありませんって通過してしまうとか、そういうふうなものっていうのが「私は関係ありません」っていうふうな排除になってしまう。そういったものではなくて、障害のある人たちと日常を過ごすことの面白さであったりだとか、そういったものをアートの視点で社会に還元する、還元するって言葉難しいですね、溶け込ませていくみたいなことが、僕の仕事、アートイベントの企画とかでやっていたことになります。

障害のある人たちと生活をしていると、本当驚くことがたくさんあります。もちろん辛いことだとか、しんどいなっていうふうに思うこともあるんですけども、それ以上に障害のある人たちが見えている世界とか、考えているものっていう、つまり彼らの視点から世の中を見るということがすっごく面白いんですね。

「なんでこういう行動したんだろう」「実はこういう行動があったかもしれない」「なんでこういうことに興味があるんだろう」「なるほど、彼の中にはそういうふうなものがあるんだ」とか、そういう気づきっていうものを理解するのに、アート作品を見る感覚とすごく似ています。アート作品っていうものも目の前に置かれた時に「何だろう、これ」っていう分からないものっていう面があるんですよね。基本的に全て多分世の中のことは、出会った瞬間は分からないことなんですよ。ただその分からないことを分からないで排除せず、先ほど言った積極的な無視とかをせずに受け入れていく、ということがクリエイティブサポートレッツでの6年ほどの間に学んだことであったりします。

障害のある人たちと生活することとか、アートとかっていうのは、多様性を受け入れる文脈ということで語られることが多いんですけれども、実は私たちの生活の中でも他者をどれほど理解できるか、っていうのはよくわかってないんですよね。家族でも友達でも、恋人でも、相手のことを100%理解する、ということはありえないんですよ。結局自分たちには他者というものが理解できない、というふうなことから、相手を理解する、というふうな視点というものを、例えばこのアート思考とか、そういうふうな言葉で語られるようなものを、ちょっと今回お話しできればな、というふうに思います。

アート思考

今、いわゆる分断が進んでいる世の中なんて言いますよね。それはインターネットのおかげで、いろんな人たちが自分の趣味、思考だとか、所属するものの小さいコミュニティ、クラスターという言い方をするんですけど、その中で完結ができちゃうんです。言葉を何かを検索したら自分に都合のいい答えばっかりが出るようになってしまっている。本来は辞書とかは全然違う話だとか、その隣の言葉とかを見ることができたんですけども、今それができなくなってしまっている。そういう小さいことから起きている分断なんていうものを理解するのに、このアート思考っていうものが有効ではないか、そんな話をちょっと今日させていただければな、というふうに思っています。

で、早速なんですけど、ちょっとアートの話が出たんで、ちょっとアート作品の話をさせていただきますね。これは今年2024年の6月に大分で行われました、別府カルチャラルエキスポというのに出展していたyottaというアーティスト。yottaというアーティスト、一人じゃないんですね。アーティスト集団、正確には2人かな？の作品です。延岡の人だったら一度は行ったことあると思いますけど、大分駅の正面なんですよ。この巨大なコケシが置かれたこの景色が、まあ面白いですよね。正直言うと邪魔でもあるんですよ。でも邪魔だという意識から、実はその日常的に使っている交通手段の通過点でしかなかったこの大分駅の正面というものが違った景色になる。これがこのアートの力であったりします。これだけでも随分気づかなかった大分駅の姿、大分駅って書かれていて、この時計台があるみたいな、あれっていう風なちょっと足を止めてみるとか、ちょっと違う視点から見るっていうことが、例えばこの作品にも現れています。

もう一つの作品なんですけれども、これもこのyottaの作品になります。いわゆるデコ車ですよね。この巨大な砲台が乗った車なんですが、延岡だとあるんですかね、ポン菓子メーカーなんです。お米を入れてバーって熱量を炊いて、ハンマーでカーンって外すとボーンってこう、ふわふわ、ふわふわになったお米、ちょっと甘いお菓子が出てくるんですよね。最近だとお祭りとかでもまだ見る機会あると思うんですけども、そのポン菓子メーカーなんです。

これすごいやっぱりこの見た目の面白さもあるので、たくさんのお客さんが集まっていて、これがポーンってなった瞬間に、この上の砲台がガーンって動くんですね。ちゃんと水蒸気の煙がポーンって出てくる。ちゃんと大砲というふうな機能というか大砲の見た目を再現している作品になるんです。で、子供たちもまとまってポン菓子をもらって、この大砲がバーンってなって、おーなんて拍手をするっていう風な、いわゆるインスタグラムで生まれた映えるとか、見た目の面白さっていうのもあるんですけども、ここがまず一つの層なんです。もう一つ深い層があります。深い層は何かというと、この車がハイラックスっていう車なんですね。ハイラックスっていう車は実は世界的にすごい人気なんですよ。なぜ人気かというと、これが安価に手に入るものだから。いわゆる正規の兵隊さんじゃなくて、いわゆる反政府ゲリラだとかそういうふうな小さい自分たちで軍隊を持っているようなところが、このハイラックスを欲しがるんです。

なぜ欲しがるかというと、このハイラックスの上に対空射砲とか砲台を乗せて走ることができるんです。それぐらい日本製のこのハイラックスという車、日本車、海外で人気なのは本当に壊れないみたいですね。日本の人たちは結構10万キロ、15万キロぐらいで車を変えちゃうんですけども、海外だともう何十百までいかないかな、50万キロとか100万キロいってるような車も目にすることがあります。このハイラックスに乗せた砲台はこれ、どうやら映像でちょっとしか見たことないんですけども、撃ちながら走れるらしいんですよ。それぐらい頑丈なんです。ということは、実は日本という国は戦争とは無関係だというふうに我々は過ごしていますし、ニュースで最近もちょっといろんなニュースがありますけれども、関係のないこと、というふうに思っているかもしれないんですが、実はこの戦争にある種加担している、というかつながりがあるということ。われわれ日本人は、この砲台というものをポン菓子メーカーにして楽しんでいるけれども、実はその向こう側には、これを実際の兵器として使っている人たちが今まさに今世界のどこかにいるっていうことまでこう表している、そんなアート作品なんです。

見た目の面白さと、そしてその下にある深いテーマっていうの。たった1個のこの作品の中でいろんな視点が生まれてきます。こういったものっていうものがなんていうんですかね、いわゆる人間の性でもあると思います。世界中にミリタリーオタクの人とか、いわゆる兵器好きの人っていますよね。実際にそういうふうなものってのは、見た目的にかっこいいって思っちゃうんですよね。でもこのミリタリーオタクの人たちだったりとか、その兵器が好きな人たちは決して戦争が好きなわけじゃないんです。ただただこの兵器の美しさという、人を殺す道具である、というものに対するこの美しさみたいなものに魅了されつつも、戦争というものに対してこう反対する、というふうな全く対極なものを人間が持っているという、つまりこの作品自体はいわゆる人間存在そのものであるということ、そんなことをアート作品なんかから見ることができます。

この車のこの作品を感性で楽しむという見方は間違ってませんが、なぜここに置かれているのか、なぜこういう形なのかというふうな問いをしていくことで、思いもしなかった視点を手に入れることがあります。これがいわゆるアート思考というものになります。一般的にアート思考というふうに言われるものだったりとか、自己啓発本で書かれていることというのは、アーティストの自由な創意工夫を仕事や企業のアイデアに使おう、みたいなことで語られることが多いんですけれども、むしろアーティストっていうのは、そのいろんな社会の課題だったり、自分の中にあがってるコンプレックスだったりだとか、生きづらさみたいな、いわゆる不自由さや、どうしようもなさの中から創造性を発揮することがあります。

だからアート思考というのは、目の前の存在や課題に対して様々な視点から理解する、受け入れる、というふうなことが根本にあるということを、まずここでは理解してもらえればな、というふうに思います。

アーツカウンシルみやざきの事業

では続いてですね、こちらのアーツカウンシルみやざきの活動についてもちょっとお話しします。ここからは私どもアーツカウンシルみやざきの助成事業について、ちょっとお話しさせていただきたいというふうに思います。うちがやっているのが、この「ひなたの文化活動推進事業」というものになります。これは令和3年度から始まった宮崎県の文化芸術活動に対する助成金事業です。

この助成金の特徴はですね、「文化×何か」、「アート×何か」、という事業は対象になるというところが特徴です。これまで文化芸術活動の関連の助成金というと、コンサートだとか演奏会、展示会、ステージ、そういうふうな単発のものに対して「The文化」「Theアート」みたいなものに対して助成金を出してきました。よくあるのが今年の演奏会はちょっと大きい会場でやりたいとか、有名な先生とか芸能人をゲストにお招きしたいので、助成金ください、というふうなのが多いです。これはもちろん悪い話ではないんですけれども、お客さんがたくさん来て、ファンが増えるという意味では悪いことではないんですけども、いわゆる今までの活動でできなかったことを助成金を取ってやる、ということから考えると赤字が出ることを見越して助成金を申請している事業になります。

なので私たちなんかは、これは赤字補填型の助成という言い方をすることもあります。文化関連の助成金では当たり前なんですけれども、こういうふうな赤字補填型みたいなことが当たり前、という部分もあるんですけども、いわゆる他の企業系だとかまちづくり系の助成金から考えると、これはとても異例というか赤字補填が許されるの、というふうに思われるんですね。これはですね、文化技術活動というのが保護されるもの、行政から支援されるもの、だというふうな前提というのがあるからなんです。

例えば伝統芸能や伝統工芸とか、芸術作品というのは公的な資金が入るのが当たり前になっていますよね。これはこういうふうな保護されるもの、支援されるもの、というのが前提になっているのが理由になっています。これが決して悪くはないんですけれども、今までやっている保護されるもの、例えば支援されるものが前提となると、これから生まれてくる文化、芸術活動に対してのサポート支援というのができないんですね、この文脈だと。そのために「ひなたの文化活動推進事業」では、これから生まれてくる文化芸術活動と、そのいわゆる様々な課題に対して取り組む、というものを支援する、というのが目的の事業です。

評価や内容が定まった文化芸術活動というものへの支援というのはもちろん大事なんですけれども、どうなるか分からない、これがうまくいくかもしれない、失敗するかもしれない、でもこれは必要だよね、というふうなトライアンドエラーの事業にも助成をする、というのができるので、とても宮崎県の中では画期的な事業になっています。先ほど述べた通り、アートや文化というのは新しい視点を提供してくれます。だからどんな分野にも入り込むことができるんですね。例えば文化×街づくりといったら、どんなイメージをするでしょうか。街中で行われるイベントかもしれないし、例えばカフェとかいろんなちょっとおしゃれなお店が並ぶような、そういうふうな街の空間デザイン、そういうふうなものを想像するかもしれません。

あとはアート×子育てみたいなことを考えると、楽しい音楽でワイワイとはしゃいで、子どもたちがわーって盛り上がっているような姿をイメージするかもしれませんし、またはアーティストによる子どもの向き合い方をお母さんに教える、みたいなワークショップかもしれない。だから文化芸術かける何か、ってことを考えるといろんなことがイメージができるんです。なので皆さんが何か事業を考えるときに、例えばちょっとアートだったらどうしようとか、文化だったらどうなるんだろうってちょっと考えると、事業の面白さっていうのはぐっと変わります。

今回はそんな中でちょっと3つほどの事例を紹介しますね。一つ目がですね、こちらがこれパンフレットですね。これが高鍋町の高鍋フォークダンス愛好会さんの多様性の祭典というやつですね。最初高鍋フォークダンスサークルさんから助成金の相談にいらっしゃったんですね。その時は宮崎県内にフォークダンスの愛好会というのが4団体ぐらいあるので、その人たちが皆さん集まるような会をやりたいと言われたんです。これはいわゆるここの段階だと赤字補填型なんですよ。移動費だとか会場費を取りたいから悪くはないんですけども、この日向の文化活動にはちょっと合わないんですよね。という話をしてお断りすることもできたんですけど、ちょっと話を聞いてみたんです。

するとこの高鍋のフォークダンス愛好会さんの練習を毎週してるんですけども、この練習の風景を近くの老人ホームの方が結構楽しみにして見に来てるんですとか、このフォークダンス愛好会のメンバーの何人かは精神障がい系の福祉の方に出てて講師として踊りを教えに行っている。さらにはこのフォークダンス愛好会さんの発表会には地元の中高生とかがボランティアで参加しているんですって。ってなると若い人たち、いわゆる障害のある人たち、高齢者の人たちがこのフォークダンス愛好会を中心につながっているっていうことがわかったんです。それぞれはつながってないんです。このフォークダンス愛好会をハブにして、高齢者、障害のある人たち、中高生みたいなのがつながって、そしたらこの人たち全部が関われるような事業を組んだらこれはものすごく多様性のある事業になるんじゃないか、ということをこちらとしてアドバイスをして生まれたのが、この多様性の祭典です。

これが今福祉側で、国から言われている、地域が高齢者を見るみたいな話をすることがあるんですけれども、実はこれがフォークダンスのサークルが実はすでにやっていた、っていう先進事例というふうな見方もできるんですね。この写真をちょっと見ていたんだけど、これちょっとわかりづらいんですけども、実はこの踊っている後ろ側では、精神障害の障害のある人たちが音楽を演奏して、その音楽でフォークダンスの人たちが踊っています。あとこの左端の写真ですね、こちらの方では車椅子のある人たちとダンスをしています。実はうちのアーツカンシルみやざきのスタッフがこの中で一人いるんですけれども、彼女は別に車椅子の方の介助とかをやったことはないんですよ。でもこのフォークダンスを一緒に踊るということだけで、車椅子の方たちのケアっていうのを勝手に学ぶんですね。ダンスって結構動くし、車椅子の場合は車椅子のサイズっていうのを車椅子を使っている側は理解できるんですけど、周りの人たちは意外と理解できないんですよ。だからちょっと気をつけなきゃいけないんですけれども、この車椅子のいわゆる介助マニュアル、介助マニュアルというのはもちろんあるんですが、そういうことを知らなくても、この車椅子の人たちと一緒にダンスをするという視点に立つ。その相手方の視点に立った時に、「じゃあ自分は何ができるんだろう」っていうふうなことを考えることで、車椅子の人たちと一緒にダンスができるんです。これがすごいなと思った点です。

楽しみながら相手を理解する、相手の視点に立ってみるという、この経験がいわゆる愛好家の人たちのイベントという壁を越えて、いろんな人たちとつながる。そして相手を理解する、というふうな内容になった事業でした。

次の事業は、これはですね、延岡の方々もファンが多いんじゃないでしょうかね。延岡の総合文化センターの方でもよく講演をされていますユニットあんてなさんの「あんてな文化祭」です。あんてなの代表の本田泉さん、テレビCMでもよく見ますけども、助成金を申請して演劇公演をやりたいんですけれども、どうしましょうかというふうな相談を受けたんですね。それだけだと先ほど言った通り、うちは助成金が出せないんですね。演劇×何かみたいなことが必要。どうしたもんかな、というふうなことで、本田泉さんといろんな話をしたんですね。

あんてなさんってテレビCMもしていますし、意外と街中でイベントをやってたりだとかいろんな関わりがあるし、いろんな演劇関係者と、いろんなイベントを演劇公演をやっているんですね。宮崎の人たちの中でもとてもファンの多い演劇ユニットなんですよ。そう考えると、あんてなの公演っていうだけで、いろんな人たちが実はつながっていることがわかった。実はそこら辺に対して本田さんは意識はしてなかったんです。いろんな人たちに演劇を届けたい、子どもたちに届けたい、もっといろんな人に届けたい、演劇のコアな人たちにも届けたい、もっと街中が盛り上がればいいっていうことを実はナチュラルな感覚でやっていて、言語化をしていなかっただけなんです。そこをちゃんとあんてなさんやってますよね、って言語化してあげた時に、自分たちがやってきたあんてなの活動ってのはこういうことなんだっていうふうなことが、まず自分たちの活動を改めて理解することができたんですね。じゃあ何をやろうかっていった時に考えたのが、文化祭っていうテーマなんです。

文化祭っていうのはですね、これも世界的に珍しいと思うんですよ。文化祭って言うと皆さんイメージしますよね。高校の文化祭とか中学の文化祭、あと地域の文化祭、なんてもありますよね。学校の文化祭なんてのはまさにそうなんですけども、野球部がたこ焼き焼いたりするじゃないですか。なんで野球部がたこ焼きをやるのか分からないんですよね。でもたこ焼きを焼いていることを普通に我々は受け入れている、つまり文化祭っていうフォーマットに落としてしまえば、いろんなことができるんですよ。いろんなことをやっていて、これは何の事業ですかっていうふうに聞かれてお笑いもあります。ちょっと大道芸的なこともあるし、演劇もあるんですけれどもちょっとコンサート的なこともあるっていうふうな説明をすると、分かんないんですよ。分かんなくなるんですけど、文化祭ですって言うと日本人の大体が理解をするんです。これが文化祭の面白いところなんですけども、この文化祭というフォーマットをあんてなさんでやってみてはどうですか、というのでやったのが、このあんてな文化祭です。

このあんてな文化祭が面白かったのが、この当日までにラジオ放送をやったんですね。サンシャインFMで実はこのラジオ番組は未だに続いています。ラジオで放送していろんな人たちに「来てください、こんな面白いことやりますよ」みたいなことを毎週毎週放送して、いろんなゲストを呼んで、このあんてな文化祭に向かう。ここでは子供向けのものもあったり、コンサートもやったり、朗読劇もやったり、みんな大好き、濱田明良さんのチクタクパークなんてコントがうまいんですよね。コントあり、そしてちょっとがっつりしたちゃんとした演劇もあり、というの盛りだくさんの内容を行いました。

でももちろんここまで実現したのは、他でもなくユニットあんてなさんの力なんですが、文化祭っていうことはどうでしょうかとか、あんてなさんがやってることはこういうことなんですよ、っていうふうなアドバイスとか提言をしたのが、いわゆるうちの仕事になります。気づかないんですよね、外の人から言われないと。結局このあんてな文化祭はコロナ禍に関わらず大変盛況で、残念なのは本田誠さんが最後のステージになったのが、このあんてな文化祭でした。でも喜んでくれてましたね。すごい、これをやったことで元気にもなられていたし、この後あんてなというのは未だに活動していますし、何かそういうのは一つの契機になっちゃうのではないかな、というのは自分でもお力になれたのではないかな、というふうに思っております。

続いてもう一ついきます。こちらがですね、「カフェ　文学と汗」というふうな事業になります。グンジキナミさんというライターさんがですね、やった事業なんですけれども、このグンジキナミさんは、宮崎県内で活動されているライターさんであったりだとか、あとMRTラジオでは本の紹介をするような、そういう風な番組を持っています。グンジさんはその本や文章の価値、というのをとっても大切にされている方なんですね。その結果、物書きだけじゃなくて、宮崎の若いクリエイターの人たちを集めて同人誌を作りました。その人たちにいろんな文章、エッセイだったり小説だったりとか、詩だとか単歌みたいのもあるんです。そういったものを書いてもらった同人誌、これが「文学と汗」というふうな同人誌になります。これ、グンジさん自腹を切ってやってるんですね。宮崎県内の本屋さんでも売ってます。ある程度収益にならないと赤字になっちゃう、それだけやっぱり思いがあるんですね。こんな宮崎県内の若い人たちの支援をしているのであれば、県としても助成金を出したりだとか、いろんなサポートを受けてやりませんか、という話をしたんですが、グンジさんはいや、それはしません。これは私が好きでやってるから、やらないんです、というふうに言ったんですね。

なるほど、と。ただグンジさん側としては、この同人誌を買う人だけではなくて、新しいファンや文学のことを好きになってもらう人、本をもっと楽しんでもらう人を増やしたい、という課題はあったんです。そういうふうなものとかって助成金の事業でできないんですかね、っていうところをまずこちらに相談してくれました。いわゆるノーアイデアの状態です。うーんって考えて、この「文学と汗」という同人誌を、グンジさんはどういう時に見てほしいですか。どういうところで読んでほしいですか。家の本棚もありますよね、学校の図書館というのもあるかもしれない。どういう層の人たちに読んでほしいですか。高齢者なのか、若い人たちなのか。でも、書いている人たちが若いクリエイターの人たちということは、そういう若いクリエイターの人たちにも読んでほしいわけです。って考えた時に、あっと思ったのが、そういう人たちが集まって、そういう人たちが読むような場所っていうのに、カフェはどうだろう？ということで提案したのが、この「カフェ　文学と汗」です。これがですね、ちょっと画像を見ていただくとあれなんですけども、すごいおしゃれなんですよ。で、ハコニワコーヒーさんって宮崎市の駅前のところですね、アミーロードにあるカフェを期間限定で「カフェ　文学と汗」という名前にしまして。

で、この写真のこの右側の上の方ですね、これ何かというと、これランチョンマットなんです。原稿用紙の形をしたランチョンマットなんです。原稿用紙見たら、ちょっと何か書かなきゃいけないのかな、じゃないけど、そういうことって起きますよね。実際にこれをランチョンマットに文章を書いた人がいて、それが会場に貼られてたりだとか、それがインターネットに上がったりする。さらには毎日やってるわけじゃないんですね、毎週隔週開催だったかな。その時の度に、いわゆるゲストを招いて、文学を楽しむワークショップだったりだとか。

面白かったのはですね、半田孝輔さんという方がゲストに来た回なんて、半田さんが「あなたの人生とかあなたの趣味とか」を半田さんがわーって聞いて、「うん、分かりました。あなたにはこの本がおすすめです」っていう本をおすすめする、というイベントもありました。これいいなと思ったんですけどね。この結果、このカフェに来た、ただただ来たお客さんも「これ面白いね」っていうふうなことになって、この「文学と汗」を知ってもらうことにもなりましたし、このランチョンマットに文章を書くということが新しく、自分で文字を書く、自分の気持ちだったら、内面を文字にする、っていうことの機会になったんですね。今、手書きで文字書かないじゃないですか。書くとしてもメモだけなんですよ。ちょっと小説っぽいことだったりとか、ちょっと思ったことってスマホに入れちゃうんですよね。みんなこれ多分意識してたら、分かります、原稿用紙に書くことほぼないんですよ。そういうふうな機会を提供できましたし、いつの間にかお客さんが参加者になっている、という仕組みも見事だなと思いましたし、この「カフェ　文学と汗」きっかけに本を読もう、物書きをしよう、という人も生まれています。そういうふうな事業ですね。

なので、カフェというものと、文学というのの親和性はもともと高いんですけれども、そこにたどり着くまでのいわゆる道筋であったりだとか、アイデアを出す、というふうなことが、例えば私たちの仕事だったりもします。自分たちの中でやっていると意外と難しいんですよ。自分たちの活動しか見えないから、そこに外部の人の目線を入れる、または自分の目線をちゃんと外部の視線に持っていく、っていうようなことが、先ほどから述べているアート思考っていうふうなものだったりします。この辺りをちょっと続いてもう少し詳しく述べていきますね。

文化芸術活動からアート思考っていうものが成り立つわけではないんです。今までアートとか文化の事業を紹介しましたけども、どんな事業でも文化やアートの視点を入れてみると、面白くなるということがポイントだったりします。違う視点から物事を見てみるには、アートというものが有効だという話をこれまでしてきましたが、その結果生まれる2つの効果について、ちょっとお話ししたいと思います。

アートの効果

一つはですね、創造性を発揮することができる。もう一つはネットワークを作ることができる。目の前に課題があってどんなことでもいいです。商店街が人が少ないですとか、ちょっと子育てが大変ですとか、ちょっと周りの人たちと孤立しちゃってますみたいな。そういう課題があって、これに対して直接アプローチする取り組みとして、運動というのがあります。社会運動とかで呼ばれますよね。デモだったりだとか、署名活動だったりだとか、みんなでそれを考える会、勉強会みたいなことをやるんですね。

この1個の課題に対してアプローチするのに、運動というやり方はとっても有効なんです。ただし、それだけの多くの人たちの協力だったり、参加が必要になったりだとか、その活動をするための時間的な拘束とか、イデオロギーとか、そういったもの、ある種政治性もはらんでくるんですけども、そういった拘束がどうしても発生してしまうのが、この運動のデメリットというか、デメリットというのはちょっと厳しい、きつい言い方かもしれませんが、ちょっとやりづらさだったり敷居を高くしている点だったりします。

運動というのは大変効果的なんですけれども、アートによる取り組みというのが違うのが、例えば反戦映画だったりだとか、社会系のドキュメンタリーとかありますよね。NHKだったら72時間とか、そういうふうないろんなものというのを、いわゆる知る機会というのがあるんですけれども、これはですね、全てそれを解決に向かって動く人たちを作るためではなくて、世の中ではこういうことが起きているんですよ、ということを理解する、そういうことを知ってもらいたいということにとても有効に働きます。運動性と違うのは、みんなでこうやるじゃなくて、アートとか文化とかになると、みんなに見てもらう、メディアという言い方もしますね。メディアの方は、見てもらうその人たちが全部運動に加担する必要はないんです。それはとても怖いことなんで、それはファシズムって言うんですけれども、このファシズムの話はちょっと置いておきますね。

で、アートとかそういうふうなことがやる社会的な動きっていうのが、例えば明るい革命とか、まろやかな運動みたいな言い方をされることもあるんですけれども、人間において知るっていう行為ってすっごく大事なんです。一度知ってしまうと無視できないんですよ。例えば先ほど話した障害のある人たちがアート作品が内閣総理大臣賞を取ったんですよ。そんな人がいるんだ、ちょっと調べてみようって言ったら、それを知っちゃうんですよ。そうするとその子の作品だったり、その子のニュースがあったらちょっとパッと見てしまうとか、あと自分には全く無関係だと思ったけれども、なんとなく憤りを感じるニュースとかありますよね。強盗事件とかね、昨日とか、ちょっとしんどいなと思いましたよね。それを知ってしまうと人間、行動するんですよ。自分の両親はどう思う、今どうしてるだろうかとか、ちょっと電話してみようとか、あれ、そういえば誰々さん家も結構山奥の方にあったりするから、ああいうとことか大丈夫なのかなとか、ああいう防犯はどうなんだろうって、パッて考えちゃうんですね。だから知るっていうことから、人間は結構即行動する生き物でもある、っていうことが大事なところです。

この知るっていうことのために、教育っていうのはすごく大事なものなんですが、今の教育というのはどうしようもなく合理化、合理性を優先した教育になっています。つまり正解ありき、または正解に向けて近道を選ぶ、というふうなものが今の現在の教育です。これはとても僕は心配しています。むしろ遠回りしたり、失敗したり、それで分かることというトライアンドエラーの機会を、教育の現場から失われてはいないだろうか、というのをちょっと心配しています。やっぱりね、ストーブは触ってみないと熱いかどうかって分かんないんですよ。みんな子供の時やけどするよね。熱いって言ってあれが大事な経験なんですよね。で、この経験するとか、その知るという風な行為を、これを何かに使うということになった時に、工夫するということが生まれてきます。この工夫するっていう行為が創造性になります。人間っていうのはですね、面白いもので、この工夫することとか、何かを作ることに喜びを感じるように、プログラミングがどうやらされているらしいんです。だから遊びをすると楽しい、ゲームをすると楽しい、そこに例えばスポーツもそうなんですけども、そこに戦略を立てたりだとか、もっとこういうトレーニングをしたらどうだろうか、じゃあそれで成果が出たとか、というふうな成果に対して喜びを感じるのではなくて、その工夫をした行為が結果が出ました、ということに喜びを感じる生き物なのです。

そのためにこの創造性という喜びを求めるために、本を読んだりだとか、誰かと話をしたりだとか、創造性というのは、こういうふうな自分の創造性を、誰かの創造性と磨き合うことでしか成長していかない、発揮されないものなんですね。そうなってくると、誰かと喋る、誰かに伝える、みたいなことをすると、ネットワークが生まれていく。これがアート思考の2つ目のポイントになります。アート思考というのは、これらの効果があるというふうなことを皆さんが理解してもらえると、これからの事業であったり、生き方でもそうですね。この人の言っていることさっぱり分からないけれども、とか、このニュースなんでこんなことが起きるんだろうとか、というような疑問に思ったことが、その人の視点に立つ、全然違う視点から見てみる、みたいなことから、受け入れることということが増えてくると思います。この受け入れる寛容性というものが、いわゆる人間の幅、例えば皆さんだったらその事業の幅みたいなものにつながってくるのではないかな、というふうに思います。

アート思考と助成金

こういったアート思考が盛り込まれた助成金申請を、私たちが受けることがあるんですね。うちなんか助成金が、宮崎県内では多分最大1,000万、1,000万ほどの助成金を持っていますので、申請書が届きます。全くこういうアート思考だとか、面白くない事業も入ってきます。そういったものに対してはアドバイスをしたりします。逆にアート思考がガツンと入ってきたような申請を受けると、我々はどう思うかというと、この課題に向かって取り組むということだけじゃなくて、この課題のさらに向こう側に何か生まれてくるというものが見えちゃうから、単純にワクワクするんですよ。ね、このワクワクさせるという申請書はほぼ通ります。だって新しい未来とか、我々の見たことがないものに対して、その事業を見せてくれるというふうなことを本人たちが意思を持っているし、その申請書に書かれているからです。

この辺りをもう少し説明すると、申請書の欄には事業目的と事業内容というのを必ず書く欄があります。ここに何を書けばいいですか、という質問をよく受けるので、ここでちょっとお話ししておきます。申請書の目的の欄には過去、現在、未来を書いてください。事業内容のところには5W1Hが書かれていれば大丈夫です。

この目的の欄の過去、現在、未来というのはどのようなことかというと、このような課題があります。このような現場があります。このようなことで困っています、というこの状態が過去です。あなたが見てきたものですから過去です。それに対して私たちはこういうアプローチをします。この事業をこういう目的でします。この現状を変えたいんです。これをもっとこういうふうにするのは必要だと思います、ということが現在、ここが目的のコアになります。その結果、未来、こういうことが起きます。こういうことが期待されます。こういう変化があるかもしれません、っていうことが書かれているもの。この過去、現在、未来が書かれているものというのがいい申請書です。

目的って何を書けばいいんですか、って言ってお題目をドーン、と出しちゃう人いますね。社会包摂が必要ですとか、もっとSDGsが必要です、っていうようなことを出しちゃうんですけども、なんでその人がSDGsが、その申請書を書いた人が、その主催者がまたはこの主催団体が、なんでSDGsをやるかっていうのが分からないんですよ。それが過去のところに書かれているわけです。私たちはこういう活動してきました。で、こういうふうな課題があります。で、こういうふうな現状をもっと変えていきたいんです。だからSDGsをやるんです、とかで。その後、私たちがこの助成金が受け取る側がメリットとして考えるのがこの未来の部分なんです。なるほど、ここにお金を助成金を出すと、私たちの社会をこういうふうにしてくれるんだ。もっと生きづらさを緩和することができるんだとか、っていうふうなものになってくる。

よくあるのが、やりたいことを先行して書く申請書が多いです。プロジェクションマッピングやりたいですとか、さっき言ったコンサートやりたいですとか。だからコンサートをやりたいから音楽の普及を目的にします、プロジェクションマッピングをやりたいから映像文化の普及を目的にします、という逆転しちゃってるケースが多いんですね。手段の目的化とも言いますけれども、これはですね、大体落ちます。だからもし皆さんがやりたいことが先行しているな、とか、やりたいことがあることはいいことなんです、なんでそれをやりたいのか、っていうことを自分の中で聞いてみてください。自分はこういうことに興味があって、こういう人たちとつながりがあって、今こういう課題がある。または延岡ではこういうことされてないよね。そしたらきっと協力者も集まってくれるし、その事業を楽しんでくれる人たちがいるだろう。その結果、新しい未来が生まれてくる、というふうなことを考えてみるといいと思います。答えは意外と自分の内側にあります。

助成金というのはお金を出している人がいるんですね。うちだったら宮崎県です。宮崎県がお金を出しています。他にも企業がやっている助成金もありますし、延岡市がやっている助成金もあります。これの時に助成金の審査のポイントとなるのは、延岡市だったら延岡市のメリットになるかどうか、うちだったら宮崎県の文化芸術にメリットになるかどうか、ここがポイントになります。だからそのポイントというのは、どこに書かれているか、というと、この先ほど言った目的の未来のところなんです。その未来を実現させるために、この事業ではこれをやります、これをやります、これをやります、ということが書かれていると、いい申請書なんですよ。

よくあるのが、芸能人を呼びたい系が多いんですよ。なんでその人を呼びたいのかがさっぱり分からないんですよ。よくよく聞いてみると、団体の中にその人のファンが多いからなんですね。だと助成金出せないですよね。なんでそこのファンなのか、見た目だったら難しいけれど、でもその人が例えば、そういうふうな活動に対して発言をしていることが、有識者として社会的に認知されていたりだとか、その発言がとても価値があるものです、というふうに認められているかとか、そういうふうなことがあると、じゃあそれだったらその人はふさわしいですよね、っていうことになります。ただよくわかんない方でも、その芸能人がせっかく来るんで、じゃあコンサートもつけます、ってなってくると、それはちょっと違うだろうとか、そういうふうなことで目的を達成するために、そのために必要な過程を事業内容で踏まえているか。5W1H、いつ、どこで、誰が、何故、何を、どのようにやるのか、ということが明確に書かれている申請書は、これはもう間違いなく通ります。

世の中にはいろんな申請書があって、各項目がたくさんあるものもあります。経済効果を求められるものとか、お金の出どころであったりだとか、そういうところの証明まで求められるもの、いろんな申請書があるんですけども、基本的には事業目的と事業内容がしっかり書かれていれば、あとは応用するだけです。なのでそんなに難しくありません。国の助成金も頑張れば取りに行けます。

で、この皆さんの自分たちの中に、この内側の中で問いかけていく、自分の経験であったりだとか、団体の中で大事にしているものというのが、一体何が課題なのか、というふうなことを考えるときのポイントに一つあるのが、個人課題の社会化というテーマです。例えばシングルマザーの方がいます。旦那さんがいない、お子さんはいる、大変らしいんですよね。シングルマザーではないんで分からないんですけども、いわゆる子どもが学校に行く、学校のその前か保育園に送り出すまでにいろんな準備をしたり、送り出したら仕事に行く。でも急に熱が出ましたとか、朝急に具合が悪くなりました、ってなると正社員として働けない、っていう現状が。ここら辺は少し働き方改革で変わってる部分もあるんですが、制度は変わってるんですけど、人々の心持ちが変わってないから、どうせ私は正社員は無理だろうって思って、パートになってる方が結構多いんですよ。そういうような現状の中でパートをしている、やっぱり子どもが熱出しました急に帰らなきゃいけない。結局子どもと職場、家と職場の往復、だけになってしまうと、人間に孤立感が生まれるんですね。自分は社会に果たして必要とされているんだろうか、とか、そういえば友達とか楽しんでるけどいいなとか、なんかFacebookとか見て、みんな楽しそうでいいなぁとかっていうふうな気持ちが、どんどんネガティブに捉えた時に、孤立感というのが生まれてきます。この状態がまず良くないんです。ネットワーク、つながりがない状態ですから。この人がこのシングルマザーの方が、もしかしたら、こういう風な課題を抱えているのは自分だけじゃないかもしれない、もしかしたら同じように悩みを抱えている人がいるかもしれない、そういうふうに思った瞬間にこれが社会化するんです。実際に今みたいなケースはたくさんあると思います。宮崎をはじめ全国、そういうケースがあると思います。そしたらそのお母さん方が集まって、ちょっと話をする会を作る。その時だけちょっと託児をちょっとお願いしたりとか、保育士さんとかに来てもらってシッターさんに来てもらって、たくさんの子どもを見てもらって、ちょっとお話をしてお茶をするという機会を作りました。そしたらどうやら、みんなコンサートとかライブとか、そういうふうなのに行きたいんだけど、行けないよね、っていう話が出てきた。だったらそういうふうなイベントをしようよ、っていうふうなことになったら、託児付きのコンサートが生まれてくる、そうなってくると、そういうこといいなっていうふうな、いろんな一番最初のメンバー以外の人たちが協力者だったり、メンバーとして加わってきます。さらにはそれを支えてくれるサポーターというのも生まれてきます。こうなった時に社会化していくんです。だから自分の中の個人の課題というものを、まず一度見つめ直してみると、意外と答えというのは難しくないかもしれません。やりたいことが先行している時に、この個人の社会、個人課題の社会化って生まれてこないんです。ここがポイントです。だから今やっている活動というのは、果たして何のためになっているんだろうか、っていうのを一回一回考える機会とか、その課題に対して一回見つめ直してみるとか、そういうふうな機会というものをやってみると、自分たちの活動というものがプラスに働いたりだとか、見直す機会、どうしても立ち止まってしまうものに対して、いいスランプとか、そういうことになるんですよね。そういうふうな機会になるんじゃないかな、というふうに思います。

自己紹介

最後にちょっと私の自己紹介のページをちょっと載せておきます。正直言うと、私自身は別に特別な人間では全然ないんですね。若い頃に会ったアーティストがただただ面白かったから、こういう人たちと一緒に仕事ができればいいな、って思ったことで、アートマネジメントを勉強して、今、こういうふうな宮崎県の文化、芸術のいわゆる、統括する立場にいるんですが、僕自身は作品を作れませんし、全く特別な人間ではないですし、正直皆さんと一緒の人間ですし、職歴も7回ぐらい実は変わっています。一番最初の仕事は、僕はダイヤモンドのバイヤーでした。その後コンビニ夜勤もやったことあります。そんなことで、いろんな世の中を見たときに、相手を理解することの、例えば言語が違うとかってありますよね。あと食生活が違うとか、大事にしているものが違うとか、そういったものが全てひっくるめたものが文化だったりします。だから文化が違うということをまず考えたときに、その先から、じゃあ相手を理解するにはどうすればいいんだろうな、っていうふうなことを続けてきた結果、今みたいな立場にいるというだけです。

まとめ

なので、皆さんがこれからされる活動というのを、すごく僕も楽しみにしていますし、それでうちの助成金をぜひ取りに来てください。その時にいろんなお話を聞かせてもらえたら嬉しいな、というふうに思います。うちのアーツカウンシルみやざきはいつでも相談窓口を開いていますし、だいたい僕かあともう一人、中山というのが対応するんですけれども、いろんな情報が、それが宮崎県の文化にとって利益になる、それが宮崎県全体、そして全国世界の利益になるという考えのもとでやっています。そんな時に、お話しした時に、ちょっと山森さんの話を聞いて、ちょっとアート思考というので、こんなことを考えてみたんですよ、みたいなことがあったら嬉しいな、というふうに思います。1時間ほどしゃべってきましたが、そんなことでもし皆さんが、使っていただければ、こちらとしても冥利に尽きるかな、というふうに思います。なかなかしゃべらせていただきました。ご静聴ありがとうございました。ご質問等お待ちしております。一旦ここで締めさせていただきます。ありがとうございました。